

ヨハネ文書と浄土三部経 にみられる人間理解の共通性

今 泉 晴 行

The Documents of John and Jodo—sanbukyo
I. John

Haruyuki Imaizumi

《はじめに》

ひとは「信」なくしては生きてはいけない。「人間は信じる生き物である」というひともいる。なにも信じられないという人がいる。本当になにも信じられなくなると、人は一步も自分の部屋から踏み出すことはできない。街も歩けない。バスにも乗れない。外でお茶を飲むことも、食事をすることもできなくなる。そして、家庭を持つこともできないし、社会に生きていくこともできなくなる。即ち、人間関係を誰とも結べなくなる。

「なにも信じられない、だれも信じられない」と言いながら生きている人は、意識しないところで、様々な《もの》や《こと》や《ひと》を信じているのである。生きている限り、やはり、その人は信じている《こと》や《もの》があるはずである。

しかし、「信」の根本は、『名』を持つ誰かを信じることにある。それも単なる「信頼する」ではなく、「みづからのすべてをそれにかける」ということにまで至るのではないかと思われる。

このような「信」は、洋の東西、時代を問わず、人間の根本に厳然と存在すると考えられる。その「信」のありかたをいささかでも明らかにしたいと考え、先ず、新約聖書のなかのヨハネ福音書、ヨハネの書簡と呼ばれるものを中心に上げ、そして浄土三部経のなかにみられる「信」のありかたを比較検証し、「信」の姿をより明確にできたらと思う。

そして、今回は、ヨハネ福音書に見られる「信」を取り上げてみたい。

I、ヨハネ文書に於ける「信」の捉え方

1、ヨハネによる福音書

1) 「序」

ヨハネ文書、とりわけヨハネによる福音書と呼び慣らわされている記述のなかに、 $\pi \iota \sigma \tau \epsilon \upsilon \omega$ と言う語句は、97回、用いられ、ことごとく「信じる」と言う日本語を当てられている。

しかし、その目的語、即ち、なにを信じるかということは異なっている。一つひとつを厳密に見ていくと、先ず「序」では、いささか判別しにくい所もあるが、1節、7節では《光 ($\tau \omicron \upsilon \phi \omega \tau \omicron \varsigma$)》である。この語は、「言 ($\lambda \acute{o} \gamma \omicron \varsigma$)」、即ちイエスを表象する「光」を目

的語としている。「光を信じる」ということになる。「光」とは当然、4節で「言（ことば）のうち命があった。命は人間を照らす光であった。」と説かれている、その「光」である。

次に、同じく「序」の12節では、「その名を信じる人々」という使われ方がみられる。「名」には、ユダヤ独特の意味合いが籠められた「名」であることはいうまでもない。その名を信じること、即ち、その名を持つ人格を「信じる」ことである。そして、「言（ことば）」は、「その名を信じる人々」には、「自分を受け入れた人」と同様に、「神の子となる資格を与えた」。

2) フィリポスとナタナエルの召命

さらに、1章50節で「信」の意味が現れて来る。この個所で、フィリポスの召命に次いで、ナタナエルについての記述がある。ガリラヤのカナの出身（21, 2）であるナタナエルは、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と語る。フィリポスは、「来て、見なさい」と応える。そして、ナタナエルは「神の子、イスラエルの王」と信仰告白をすることになる。「信じる」という動詞が向かう目的は、イエスである。イエスの言辭にも「見る」と「信じる」の両語が用いられている。なお、「イスラエルの王」とは、後期ユダヤ教の用語では、当然メシアを意味する。ここには、「来る」、「見る」、そして「信じる」との関連が見られる。また、「見る」と「信じる」という動詞は、11節、40節でも密接な関連を持って用いられている。

3) カナの婚礼—しるし

2, 11では、イエスは、その「栄光」を表し、その結果、「弟子たちは信じた」。ここでも「信じる」のは、「栄光」を「見る」からである。

この状況のなかで、マリアの言葉に注目がいく。断りを示す冷厳とも言えるイエスの言葉の後に、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と語るマリアは、イエスを待ちながら「見ていた」のである。マリアは「信」の在るべき姿を示していると言える。

この個所でも「信じる」方向は、イエスに向かっている。

しかし、弟子たちの「信」は、完全なものではなかったことが、2, 22で明らかにされる。「しるし」に触れても、不完全な「信」しか持てなかった現実が明らかにされる。何故なら、「イエスが死者のなかから復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉を信じた」と記されている。

ここでは弟子たちが信じたのは、「イエスの言葉」である。

つづく2, 23では、「そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた」。一般に、しるしを見て、人々は信じることもある。しかし、カナの婚礼での「しるし」を見て、人々がイエスを見捨てたように、過ぎ越し祭のあいだ、エルサレムで繰り返しなされた「しるし」に触れて、一旦は「信じた」人々も同様であった。しるしを見た回心は正しい方向への一歩かもしれないが、弱さ、あるいは欺きから我々を解放しない。人間の弱さがまだ燻っているのである。「神の子」への「道」はさらにあゆまなければならない。（注1）

4) ニコデモ

三章には、「信」が、8回も用いられている。

3, 12に2回。その目的語は直接には、イエスの「話したこと」を指しているが、それはイエスの人格にまで及ぶことである。その直前の3, 11では、「知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしの証しを〈受け入れない〉ことを語る。3, 12は3, 11で語られたことの具体化説明であり、〈受け入れない〉ことは、〈信じる〉ことの対極にあるもので

あることに注意しなければならない。

3,15は、日本語訳では目的語が消えて多少不明瞭ではあるが、原文では《αυτω》と明確に示され、「彼」を目的としている。この「彼」は、前節で語られ、宗教史的には後期ユダヤの黙示文学に由来する「人の子」《του υιου του ανθρωπου》を指す。

3,16は、日本語訳にも見えるように、同様に、明らかにイエスを指す「独り子」が対象となっている。

3,18では、3回、「信じる《πιστωω》」が使用されている。1回目と2回目は分詞形が用いられ、同様に「御子（彼《αυτου》）」を目的としている。最後の3回目は過去の実行を示す用法で、その対象となるものは「神の独り子の名」である。

3,19で「光が世に来たのに」という言い方で、「イエス」、「独り子」、「御子」は、「光」であることを明言する。

3,36では「信じる」対象は「御子」、即ちイエスのことである。「御子を信じる人は、永遠の命を得ている」と現在形で示されている。これは、後期ユダヤ教ないし原始キリスト教の黙示文学の未来待望が新たに理解し直され、現在の終末論となったといえる。（注2）

5) 四章

ここでは「信じる」は、7回、使用されている。

21節では、イエスは、サマリアの女に向かって、「婦人よ、わたしを《信じ》なさい」と語る。明らかにイエスがその対象となる。

39節において明確に「イエスを《信じ》た」と記されている。

41節でも、やはり、39節からの流れの中で考えると、その対象となるものは、イエスと思われるが、この逸話全体の骨組みの中で考えると、「イエスが語ったこと」を指し、「キリストと呼ばれるメシア」を「信じた」可能性も残る。

42節も同様である。

48節で役人に向かって語る言葉も、同じくイエスを「信じない」と考えられるが、「サマリアの女」の後に配列されていることを思えば、同じく「キリストと呼ばれるメシア」の可能性もある。

50節では、「イエスの言葉」が直接目的語となっている。

53節では、当然51節の帰結であり、直前に配置された逸話との関連の上からも、イエスを「信じる」ことの具体的な内容は、「キリストと呼ばれるメシア」であると考えられる。

6) 五章

この章も同じく7回使用されている。

24節は、「わたしをお遣わしになった方」であり、

38節では「父がお遣わしになった者」と対照的であり、ヨハネの独自性が見られる。

44節は、41節からの文脈から、とりわけ43節の「わたしは父の名によって来たのに、あなたたちはわたしを受け入れない。」から見ると、「わたし」、即ちイエス自身を対象としていると思われるが、より厳密には、「わたしが父の名によって来たこと」を指す。また、「受け入れる」ということと、「信じる」との連関が示唆されている。

46節は、あきらかに「わたしをも《信じ》たはずだ」と記されている。

47節は、最初は、「モーセの書いたこと」で、二つ目は「わたしが語ること」で、目的語が明瞭に示されている。

7) 六章

この章では、9回も用いられている。

29節、「神がお遣わしになった者」を「信じる」ことは「神の業」とされる。

30節、「見て」、そして「あなたを信じることができるように」。ここでは、「見ること」が、「信じること」の前提とされている。

35節、「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく」に対比して、「わたしを信じる者は決して渴くことがない」と続く。ここでも、「来る」ことの重要性が、「信じる」に不可欠であることが示されている。

36節、「わたしを見ているのに、信じない」。「信じない」のは何かというと、同文のなかに、「イエスを見ているのに」とあるから当然、イエスのことである。30節では、「見る」ことの重要性について記されているが、すべての「見る」ことができる者が、「信じる」ことができるのではない。

40節、「子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり」、「子」、即ち、イエスである。重ねて、「見て」、「信じる」ことが記されている。

47節、「信じる者は永遠の命を得ている。」。この個所の文頭は、「わたしは天から下ってきたパンである(6,41)」で始まる。その言に対して、ユダヤ人のつぶやきが起きる。

「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして、『わたしは天から下ってきた』など言うのか(6,42)。ある意味では当然過ぎる疑問であり、このつぶやきに対して、イエスは重ねて言う。

「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない(6,44)」、「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る(6,45)」。 「わたしのもとに来る者」、それは《イエス》を「信じる」者である。そして、「信じる者は永遠の命を得ている」。

イエスは41節で、「わたしは」「《パン》」と初めて言明し、48節で再度「わたしは《命のパン》である」と語り、51節で、形容句が付き「わたしは天から下ってきた《生きたパン》」と明白にされる。

64節に2回使用されているが、64aの「あなた方のうちには信じない者たちもいる」との言明の前節には、「命を与えるには霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなた方に話した言葉は霊であり、命である」があり、この言葉によって、「信じない者」という語が引き出され、そして、「信じない者たちがだれであるのか、またご自分を裏切る者がだれであるかを知っておられた(64b)」とつづく。この2個所とも「(イエスを)信じない者」を指すことは言うまでもない。具体的には、イエスは「天から下ってきたパン(6,41)」、「神のもとから来たもの(6,46)」、そして「命のパン(6,48)」であることを「信じない者」を内包している。また、ここで「信じる者」と「信じない者」とが明らかになってくる。最後にイエスの「『父からおゆるしがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ」という言葉により、弟子たちの離脱が起きる。また、「わたしのもとに《来る》」と《信じる》との関係が浮かび上がる。

69節のシモン・ペテロの宣言にも「信じる」がみられる。「あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは《信じ》、また知っています」。「信じる」対象は、「あなた」即ち、イエスであるが、直接には「あなたこそ神の聖者」であることは言及するまでもない。

8) 七章

この章では3回、用いられている。

5節、「兄弟たちも、イエスを《信じ》ていなかったのである」

38節、「わたしを《信じる》者は、聖書に書いてあるとおりに、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」

39節、「イエスは、御自分を《信じる》人々が受けようとしている“霊”についていわれたのである。」

以上、3個所とも「信じる」対象は、イエスである。

9) 八章

24節b、「『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬようになる。」

この言説の用法と同様の個所が、他に、2個所見られる。一つは28節「あなたたちはわたしを上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず。ただ、父に教えられたとおりに話していることがわかるだろう。」、次に

58節b「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」。イエスの先在性は時に縛られることなく、時間を超越して存在することを示しており、この福音書の『序』と重なる面がある。

30節、「これらのことを語られたとき、多くの人がイエスを《信じ》た。」

31節、「イエスは、御自分を《信じた》ユダヤ人たちに言われた。」

『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする』

「わたしの弟子」、即ちイエスの弟子とは、「わたしの言葉にとどまる者」である。「信じる」ということのなかに、イエスの言葉にとどまるということも、一つの要素であることが理解できる。この言葉に絶えず信頼を持ってとどまる者だけが、真にその弟子である。しかし、『留まる』ことは時を志向する。そして、この留まる時、すなわち信頼の時は、言葉の告知の時を含む。言葉に留まることは、信じること以外の何物でもない。(注3)

45節、「しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを《信じ》ない」。

46節、「あなたたちのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを《信じ》ないのか。」

日本語訳だけを一見すると、とまどいを禁じ得ない。何故なら、45節で言われている、「真理を語るから、信じない」という言説と、「真理を語っているのに、何故、信じないのか」という問いかけに立ち止まらざるを得ない。

イエスが語り合っていたのは、21節の初頭に記されているように、「イエスを信じたユダヤ人」であったはずである。しかし、「父」を巡り、彼らとの隔絶が決定的となり深刻な事態に至る。一度はイエスを受け入れた「ユダヤ人たち」との関係も険悪になる。イエスは言う。「わたしの言っていることが、なぜわからないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ(43節)」。彼等の父は、「真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がない(44 b.c)」。「悪魔」は真理を持っていない。それはセム的—それ故に聖書的—な、範疇の表現方法である。「悪魔」と反対者は『嘘』の範疇に属し、それゆえにイエスに『聞く』ことができない。なぜならイエスは(『神からの存在』)という範疇にかなって『真理』を話しているからである(注4)。「彼らが理解する力がないということではない。それは彼らが聞くことを拒み、理解することを拒んでいるということである。あまりに永く自分勝手な願望や悪の声に耳を傾けていると、遂には、神の発する波長に合わせる事が全くできなくなってしまう(注5)」。結局、彼らが神の言葉を聞かないのは、神に属さず、神から出ていないからである(47節)。ここでは、「神に

《属する》」者は、「神の言葉を《聞く》」と、「聞く」ことの意義が強調される。

10) 九章

この章には、四個所、見出される。

18節、「ユダヤ人たちはこの人について、眼が見えなかったのに、眼が見えるようになったと
いうことを《信じ》なかった。」

35節、「あなたは人の子を《信じる》か」。「人の子」と呼称されるイエス。「人の子」は、
1,51、3,15、5,27でも見られる語彙であるが、元来、黙示文学で用いられた終末論的なメシ
アを指す呼称が、ヨハネでは、非黙示文学的に地上の《いま》の救済者を意味していることは、
文脈のなかで読みとれるのである（注6）。

36節、「主よ、その方はどんな人ですか。その方を《信じ》たいのですが。」

38節、「主よ、《信じ》ます」

18節の「眼の見えないこと」を対象としていることを除き、「人の子（35）」、「その方（38）」、
「主よ（39）」と、呼称は異なるが、イエスのことである。

この眼の見えなかった男の言動は注目に値する。イエスに全幅の信頼を置いている。イエスの
言うことなら、如何なることでも行うであろうことが推測されるのである。

11) 十章

五個所、見出される。

25節、イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名に
よって行う業が、わたしについて証しをしている。」

この字句の前節に、「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきり
そらいいなさい」とのユダヤ人の詰問に応えた言葉である。「信」はイエスが「メシア」である
ことを対象とする。

26節、「しかし、あなたたちは《信じ》ない。わたしの羊ではないからである。」

この個所も同様である。この後に続く27節、「わたしの羊はわたしの声を知っており、彼らは
わたしに従う」。「信じる」者の姿が描かれている。

37節、「もし、わたしが父の業を行っていないのであれば、わたしを《信じ》なくてもいい」。
「わたし」、即ちイエスのことである。

38節、「しかし、行っているのであれば、わたしを《信じ》なくても、その業を《信じ》な
さい」。

42節、「そこでは、多くの人がイエスを《信じ》た。」

12) 十一章、

九個所、見出される。

15節 b、「あなたがたが《信じる》ようになるためである」。

25節、「わたしは復活であり、命である。わたしを《信じる》者は、死んでも生きる」。

26節、「生きていてわたしを《信じる》者はだれも、決して死ぬことなはい。このことを《信
じる》か」。

27節 b「はい、主よ。あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは《信じ
ております」。

40節、「もし、《信じる》なら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」。

42節c、「あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに《信じ》させるためです」。

45節、「イエスのなさったことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを《信じ》た」。

48節、「このままにしておけば、皆が彼を《信じる》ようになる」。

13) 十二章

八箇所ある。

11節、「多くのユダヤ人がラザロのことで離れて行って、イエスを《信じる》ようになったからである」。

36節、「光の子となるために、光のあるために、光を《信じ》なさい」。

光はイエス自身を示す象徴。

37節、「このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを《信じ》なかった」。

39節、「彼らが《信じる》ことができなかった理由を、イザヤはまた次のように言っている」。

42節、「とはいえ、議員の中にもイエスを《信じる》者は多かった」。

44節、「わたしを《信じる》者は、わたしを《信じる》のではなくて、わたしを遣わされた方を《信じる》のである」。

46節、「わたしを《信じる》者が、だれも暗闇のなかにとどまることのないように、わたしは光として世に来た」。

14) 十三章

19節b、「ことが起こったとき、『わたしはある』ということをおあなたがたが《信じる》ようになるためである」。

15) 十四章

1節、「心を騒がせるな。神を《信じ》なさい。そして、わたしを《信じ》なさい」。

10節a、「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、《信じ》ないのか」。

11節、「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを《信じ》ない。もしそれを《信じ》ないなら、業そのものによって《信じ》なさい」。

12節、「はっきりしておく。わたしを《信じる》者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとに行くからである」。

13節、14節で、

「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう」。

その条件とは何か。「名によって」とは何を意味するのか。師の「名」を標榜するのは、弟子の「証し」である。

「あなた方に新しい掟を与える。互いに愛しなさい。わたしがあなた方を愛したように、あなた方も愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなた方がわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。(13,34~35)」

弟子の条件は、当然、師のおしえを守ることである。その弟子は、何かを願うときは当然、師の名のもとに希(ねが)うのである。そして、

「その条件とは、彼らがイエスの名前において求めるならばという条件においてである。というのは、すべての要求は愛から出発しなければならないことを意味する。なぜなら愛こそが、こ

の逸話の始めにおいてイエスが与えた掟なのである（注7）p.169」。

29節、「事が起こったときに、あなた方が《信じる》ようにと、今、そのことが起こる前に話しておく」。

16) 十六章

9節、「罪については、彼らがわたしを《信じ》ないこと」。

27節、「あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出てきたことを《信じ》たからである」。

30節b、「これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは《信じ》ます」。

31節b、「今ようやく《信じる》ようになったのか」。

17) 十七章

8節、「なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを《信じ》たからです」。

20節、「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを《信じる》人々のためにも、お願いします」。

21節、「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、《信じる》ようになります」。

ヨハネによる福音書の中で、イエスの使命は、「自分の意志を行うためではなく（6,38）」、みづからを「遣わしになった」（父）の「御心」を行い、その「業」を成し遂げることで（4,34）。そのために、イエスは「天から下って来た（6,38）」のである。ヨハネは、固有の語彙を用い、御子は「アブラハムが生まれる前から『わたしはある』（8,58）」ことを示し、その「先在」の $\lambda \acute{o} \nu \omicron \sigma$ は、「初めに神と共にあった（1,3）」が、「生きておられる父（6,57）」なる神によって、「言（ $\lambda \acute{o} \nu \omicron \sigma$ ）」は「世」に遣わされ（17,18）、宿った。それは、「羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである（10,10）」。

また、如何なる人も、「門（10,9）」、「道であり、真理であり、命である（14,6）」イエスを通らなければ、「だれも父のもとに行くことができない（14,6）」。そして、「わたしを通っている者は救われる（10,9）」。だが、それは「父からおゆるしがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない（6,65）」のである。「世から選び出してわたしに与えて下さった人々に、わたしは御名をあらわしました。かれらはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました（17,6）」。「神に属す者は神の言葉を聞く（8,47a）」。イエスを信じるということは、「御言葉」を「受け入れ」て、イエスが「みもとから出て来たこと」を「知り」、「あなたがわたしをお遣わしになったこと」を「信じる」ことである。そして、イエスを信じる者一人ひとりが、イエスの内にいるようになり、イエスを信じるあらゆる人がすべてイエスの内にいることで、遂には、ひとつとなることである。「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられること（14,10、10,38）」を知り、イエスを信じる者は、彼に習わなければならない。「こうして、一人の羊飼いに導かれ、一つの群になる（10,16）」のである。

イエスを信じる者の一致は、父なる神が「天地創造の前からわたし（イエス）を愛して（17,24）」、イエスが「神と共にあった（1,3）」ことに習い、「わたし（イエス）に対するあな

た(神)の愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内になるようになる(17,26)」ように、イエスの唯一の「命令(15,17)」である「互いに愛し合いなさい」を実践していかなければならない。

18) 十九章

〔しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。するとすぐ血と水とが流れでた。(34節)〕

35節、「それを目撃した者が証ししており、その証しは真実である。その者はあなた方にも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている」。

この目撃した者は、「そのそばにいる愛する弟子(19,26)」、「イエスの愛しておられた弟子(21,20)」を意味するのであろう。この福音書を記述した者と伝えられるヨハネを指していると思われる。ヨハネ自身は、イエスが人を、そしてヨハネを「愛している」ことを知っていた事実を感じさせる。

またヨハネの第一の書簡の5章6節で次のように記されている。

「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。証しするのは三者で、“霊”と水と血です。この三者は一致しています。(一ヨハ5,6～8)」。

ここで言われている「血と水」は、さらに出エジプト記の記述を想起させる。

「一匹の羊は一軒の家で食べ、肉の一部でも家から持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。」(出エジ12,46)

イエスが十字架の上に釘付けられていた、その同時刻、ユダヤ人たちは、モーセによるエジプトからの過ぎ越しを記念し、過ぎ越し祭の犠牲を捧げていた。この福音書の記述者は、明記はしていないものの、イエスの十字架上の出来事こそが真実の「過ぎ越しの子羊」を指し示し、顕わすものと感受している。

19) 二十章

8節、「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、《信じ》た。」

「もう一人の弟子」とは、当然ながら「イエスが愛されたもう一人の弟子」(ヨハ20,8)とは、この福音書の記述者と名を冠されているヨハネとされるが、この弟子が、「来て」、「見て」、「信じた」ものは何か。それはマグダラのマリアが、「まだ暗いうちに」(20,1)、暗中を手探りで探し求める。弟子たちが、「見る」のは未来ではなく、苦患の過去であることを象徴する筆遣いが読みとれる(注7)。そのマグダラのマリアが、シモン・ペテロとこの弟子に告げ知らせたこと、即ち、イエスの躰は前々日、所謂三日前に置かれた場所になかったという事を指すものである。

25節、「そこでほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。

『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して《信じ》ない。』」

トマスが「わたしが決して《信じ》ない」と言い切っていた事柄は何か。それは、他の弟子たちが語るイエスの復活の出来事の証言である。

27節、「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしの脇腹に入れなさい。《信じ》ない者ではなく、《信じる》者になりなさい。』」

イエスがトマスに語りかけた言葉のなかにある「信」は、イエスの復活という事実を指している。

そして、それは文字通りには、カントリーマンが言うように「不信仰になってはならない……」であって、「不信仰であってはならない」ということではないのである（注8）。

29節、「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから《信じ》たのか。見ないのに《信じる》人は幸いである。』」

31節、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると《信じる》ためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」

それは、この福音書の序の「父の独り子」（1,14）でも、またシモン・ペテロの兄弟アンデレの言葉である「わたしたちはメシアにあった」（1,41）、さらにフィリポの友人ナタナエルの言明した「あなたは神の子です」でも、既に明確に示されていたことである。

II. 「信」の対象

これまでヨハネによる福音書で使用されている、すべての《信じる（ $\pi \iota \sigma \tau \epsilon \upsilon \omega$ ）》を見てきた。ヨハネが如何なる意味を込めてこの語を用いたのか。記述者が用いたその意味は、ヨハネによる福音書のなかで、その用法を一つひとつその文脈のなかで丹念に探っていくことでしか、あきらかにはできない。

先ず、97回の使用のうち、《信じる（ $\pi \iota \sigma \tau \epsilon \upsilon \omega$ ）》が対象としている事象は、イエスを対象とする個所が、表現語彙は異なるが「光」（1,7、12,36）、「独り子」（3,16、3,18）、「御子」（3,16、3,36）、「人の子」（9,35）、「あの男」（7,48）、「父がお遣わしになった者」（5,38）、「神がお遣わしになった者」（6,29）、「その方」（9,36）、「主」（9,38）、「彼」（11,48）、「御自分」（7,39、8,31）、（直接話法で）「私」（6,35、6,36、8,45、10,37、10,38、11,25、11,26、11,44、11,46、14,1、14,12、16,9、17,20）等々、あきらかにイエス自身を指すと思われる個所が、40個所ある。

それでは、ヨハネという記述者にとって、イエス以外に何を、「信」の対象として記すことができたのか。

次に見られるのが、「名」。「その名」（1,12）、「イエスの名」（2,23）、「神の独り子の名」（3,18）である。様々な語り口を持っていようと、即ちイエスの「名」に焦点を結ぶ。

「名」、それはヘブライの人々には、懸け換えのない価値を具有するものである。

古代の人間にとって、「名」は、気ままにつけられたものではなく、その名を具備する人間の「使命」を指し示すものであった。神は、旧約の時代、モーセにみづからの「名」を示した（出エジプト記 3,14）。その名はYHWH『わたしはある』。YHWHは、ヘブライの民の間に現存することを意味する。しかし、この文字は神聖四文字といわれ、口にすることさえ畏れ多いという感覚が、ヘブライの民の間に発生し、「主」という呼称に変化していく。また、イエス自身二度にわたり、『わたしはある』（8,24、13,19）ということ信じることの緊要さを説く。そして、イエスは、「世から選び出し手渡しに与えて下さった人々に、わたしは御名をあらわしました（17,6）」。そして、「聖なる父よ、わたしに与えて下さった御名によって彼らを守って下さい（17,11）」。「わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛がかれらのうちにあり、わたしもかれらのうちになるようになります（17,26）」と死を前にして祈る。実際、イエスの名の本来の意は、「救う」（マタイによる福音書 1,21）であり、「神の独り子の名」を「信じる」ことにより、「言（ことば）は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた（1,12）」のである。そして、「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエス

の名により命を受けるためである(20,31)」。加えて、「神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うことです(ヨハネの手紙一 3,23)」。

また、「イエスが語られた言葉」(2,22)、「イエスの言われた言葉」(4,50)、「わたしが語ること」(5,47)と表現こそ多少差異はみられるものの、事実、「イエスの語ったこと」の意であることには変わらない。

「わたしをお遣わしになった方」(5,24)、「わたしを遣わされた方」(12,44)が対象になる個所がある。即ち、「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである」。それは、「神の子」イエスを通して、わたしたちの「父なる神」を信じることか、ということが問われているのである。

「父がお遣わしになった者」(5,38)、「神がお遣わしになった者」(6,29)、この両者と同一の意味内容を具有する字句に、「わたしは天から下ってきたパン」(6,41)という表現がある。6,47の「信」の対象とする字句は、前後の文脈から類推すると、この「わたしは天から下ってきたパン」が該当すると思われる。

他に、「信」の対象として記されているのは、「神の聖者」(6,69)、「目が見えるようになったということ」(9,18)、また、「信」が置けないとユダヤ人が、「イエスを取り囲んで」、「イエスがメシアであること」を問いつめることがあった(10,25、10,26)。元来、メシア称号は、

「これを知り、目覚めよ。

エルサレム復興と再建についての

み言葉が出されてから

油注がれた君の到来まで

7週あり、また、62週あって

危機のうちに広場と堀は再建される。(ダニエル書 9,25)」

に由来する。ヨハネの福音書の1,41で、最初の弟子アンデレの信仰告白がある。また、4章では、「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます(4,24)」。この字句は、サマリアの女の言葉のなかに挿入されている。

さらに、マルタの信仰告白が挙げられる。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております(11,27)」。この言辭は古い伝承に由るものとされているが、ある意味ではヨハネの説くイエスの本質をつくものと考えられる。事実上の終章、または後辞とみなされ、邦訳では「本書の目的」と題されている個所で、明確に

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。(20,30)」

と記述されている。

この福音書を読んでいくなかで、繰り返し立ち現れる表現に気づく。既に、序のうちにあきらかに明示されている。それは、「神から遣わされた一人の人がいた」(1,6)という言辭である。さらに、「神がその独り子をお与えになったほどに」(3,16)、「神が御子を世に遣わされたのは……」(3,17)、「上から来られる方は」(3,31)、「天から来られる方」(3,31)、「神がお遣わしになった方」(3,34)、「父がわたしをお遣わしになったこと」(5,36)、「父がお遣わしになった者」(5,38)、「神がお遣わしになった者」(6,29)、「神のもとから来た者」(6,46)等々、様々に文字表現は異なっているが、その指し示している事実は同一である。即ち、父と呼ぶべき神が、その独り子をイエスとして、人間の歴史のなかに介入したという出来事を語っている。「わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、

神がわたしをお遣わしになったのである。」(8,42)、「わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである」(7,29)ことを、まず世がはっきりと認識することを記述者は望んでいるのである。

そして、その父子関係は、「わたしと父とは一つである」(10,30)、また「わたしが父のうちにおり、父がわたしのうちにおられる」(14,11)という関係であり、さらに「かの日には、わたしが父のうちにおり、あなたがたがわたしのうちにおり、わたしもあなた方のうちにいる」(14,20)のように、「父よあなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください」(17,21)。しかし、「父がお許しにならなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない」(6,65)。それは恩恵という他はない。つまり、恵みである。そして父からゆるされて、子であるイエスのもとに来た人々は、「父」と「子」が一つであるように、「子」のもとに集められた人々もひとつにならなければならない。「羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群になる」(10,16)。一つになるということは何を意味するものであろうか。それは「子」のもとに、父の恵みによって集められた人々が一致するということであり、一致を求めるためには、イエスの残した唯一の遺言である、「わたしがあなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい」(15,12)という言辞を堅く守り、実践していくことである。

その唯一の「掟」を伝え、「いましばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとに帰る。あなたたちは、わたしを捜しても、みつかることができない。わたしのいるところに、あなたたちは来ることができない」(7,33)ようになる。

ヨハネによる福音書がもとめたのは、父のもとから来て、イエスにおいて世に現れ、そして、父のもとに返っていく「独り子」を「信じる」ことを求めたのである。

《おわりに》

ヨハネ福音書に見られる「信」をすべて取り出し、その向かうところを考えてみた。その方向性を明確に示す箇所も確かにみられるが、すべてが字句のうえで明らかではない。その意味を深めることで一段と「信」の姿を浮き彫りにできると思う。次回、浄土三部経との関連で考えていきたいと思う。

参考文献

- Traduction oecuménique de la BIBLE, éd.inintégrale Nouveau Testament p,281-351
 The Greek New Testament, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, p.312-406
 GRELOT, P., Introduction aux Livres Saints, Librairie Belin, Paris, p.331-345
 Duplacy, J., Vocabulaire de Théologie Biblique, L'éditions du Cerf, Paris, p.475-486
 George, A., et Grelot, P., Le Nouveau Testament-4, La Tradition Johannique, Desclée,
 Paris, p.97-114
 Léon-Dufour, X. Les Évangiles et l'histoire de Jésus, Seuil, Paris, p.101-133
 Léon-Dufour, X. Études d'Évangile, Seuil, Paris, p.20-31
 新共同訳 聖書、新約聖書、 p.189-212、日本聖書協会
 L. W. Countryman, The Mystical Way in the Fourth Gospel, Fortress Press, p.5-189
 ジークフリート・シュルツ、NTD新約聖書註解書「ヨハネによる福音書」p.23-112